エッセイ

江戸こぼれ話（宗教戦争）

瀬谷　俊二郎

時代は江戸初期であるが、舞台は長崎である。

・長崎

1567年、ポルトガル生まれの医師で貿易商としても大をなしたルイス・デ・アルメイダは長崎に会堂を開きキリストの福音伝道を始め長崎開港への道を開いた。

貿易のために建設された長崎港には1571年にポルトガル船が初入港し以後キリスト教と南蛮貿易の中心地として繁栄し、1580年に長崎はイエズス会領となった。アルメイダは島原、天草で布教し、多くの信者を得たのち、司祭に昇格して天草全島の責任者となり、1583年に没した。（長崎大学図書館医学分館資料）

1587年豊臣秀吉は、長崎港での南蛮貿易独占を意図し伴天連追放令を布告、翌1588年長崎を直轄領とし、イエズス会城砦を破壊し鍋島直茂を代官とした。

追放令を出すに至った理由としては、

①キリスト教が拡大し、一向一揆のように反乱を起こす恐れがある

②キリスト教徒が神道・仏教を迫害した

③ポルトガル人が日本人を奴隷として売買しているのをやめさせる等が挙げられている。

一方長崎の支配者、キリシタン大名大村純忠は長崎をキリシタンの町へと変えていった。その結果様々な場所のキリシタン達が長崎市内へ流れ込んだが、流れてきたのは信者達ばかりではなかった。

戦乱を逃れた武士達や無頼の徒、無宿人達も大勢長崎を目指して集まってきたのである。この結果、1571年の開港当時1500人ほどといわれた人口は1681年には5万3000人という人口に膨れ上がっていた。

1605年徳川幕府は、長崎を直轄地に移管、長崎奉行に小笠原一庵を派遣し、1612年に本格的なキリシタン禁教令を発した為、長崎と京都にあった教会は破壊され、布教の禁止、宣教師・信者の国外（マカオ、マニラ…）追放等が行われた。

禁教の理由は『宣教師は領土征服のための尖兵である』といわれている。

1622年に至り、貿易港も長崎と平戸に限定、ポルトガル人の追放を経て日本に来訪できる欧州の国はオランダ一国のみに確定されることになっていった。

宗教戦争はこのような混乱期の中で行われた。

・狼藉

禁教令以降、長崎を中心にキリシタン殉教の嵐が吹き荒れることになる（さまざまな本が詳しく書いているのでここでは省略する）が、キリシタンが日本でやっていた狼藉（日本側の受難）についても述べる必要がある。

この時期、一部のポルトガル人が日本人を奴隷として海外へ輸出していたことが公になっている。

……ポルトガルでは古くから奴隷制が存在し、アジアへの進出に伴いアジア人を奴隷とする貿易も行われるようになったが、九州において大規模に自国の民（女性が多い）が売買されることを知った秀吉がこれを不快に思い、1587年イエズス会の副管区長ガスパール・コエリョに手紙を書き中止を申し入れたことが記録として残っている。……

またキリシタンになった日本人信徒が異教徒（日本の神社・仏閣）への迫害・狼藉を頻繁に行っていたことも明らかである。

長崎の神社・仏閣を調べると創立がほとんど1600年以降となっているが、これは神宮寺をはじめとする古い神社・仏閣のほとんどがキリシタンによって焼き討ち・破壊されたためといわれている。

竹村倉二氏の調査によると記録としては

正覚寺（真宗）1607年
放火により全焼
深崇寺（浄土真宗）キリシタン宗徒の迫害で廃寺
斉道寺（天台宗）：36坊
すべてキリシタンにより破壊され廃寺
神宮寺（天台宗）支院
30坊余　すべて破壊
鎮道寺（天台宗）破壊
神通寺（真言宗）
1574年　破壊
万福寺（神宮寺の末寺）破壊
伊勢宮神社　破壊
淵神社（神宮寺の末寺）破壊
桜馬場天満宮　何度か破壊
……等、

デウスの神を叫ぶ信徒による破壊の嵐が吹き荒れていた。

『其の国郡の者を近付け門徒になし、神社仏閣を打ち破らせ前代未聞に候　松浦家文書』

僧侶、神主たちは戦々恐々とし、出歩くのをためらうほどであったという。

・修験者（山伏）vs キリスト教徒

キリスト教信者による神社仏閣の焼き討ち事件は日本人のそれまでの宗教観からは考えられない暴挙であり、神仏混交というあいまいな宗教観を持つ日本人に恐怖感を与えた。しかし、だからといって、自らの神社や仏寺が、外国の神の教徒に焼き討ち・破壊されるのをただ黙ってみているわけにはいかない中、武闘派と考えられる修験者（山伏）の力でキリスト教信者と対峙することになった。

この結果、1625年、長崎奉行・長谷川権六や長崎代官・末次平蔵の支援を得ながら松浦一族で唐津の修験者であった青木賢清が丸山（現在松の森天満宮の鎮座地）に諏訪神社・森崎神社・住吉神社の3社を鎮西大社諏訪神社として再興し、長崎の産土神とした。

青木賢清はキリシタンから『天狗』つまり『悪魔』とののしられ社殿建設ではひどい妨害を受ける等苦労が多かったが、人夫（建設従事者）を大村から招くなど苦心の末、一宇（一棟）の小社を建立した。

幕府が禁教を行い厳しく監視しても、一度根付いた宗教心は逆に燃え上がるものである。

司馬遼太郎曰く『人間の集団というものは、多くの場合敵によって成立している』のであり、いったん『敵を持ってしまった集団というのは、じつは敵によって集団の理性と感情を作らされてゆく』のである。

キリシタン宗徒は『天使と悪魔の戦い』という図式の中で献身的に活動したのである。

1634年、青木賢清は9月7・9日（旧暦）を祭日（※）に制定し、長崎奉行（神尾元勝、榊原職直の二人奉行制）は諏訪神事を長崎市民の神事と認定し、諏訪神社は長崎の鎮守となり、長崎市民は皆その氏子となった。

……この認定の背景には、キリシタン宗門一掃の狙いがあったと言われている……

※9月7日に大波止の御旅所（おたびしょ）に、諏訪神社と住吉神社の神輿渡御を行う。9月9日に遊女高尾・音羽が、散曲の曲舞を諏訪神社の広前に納め、還御の儀式を行う

1641年に幕府が現在地（長崎市上西山町）に社地を寄進、1650年に正殿工事に着工し51年の完成を待って遷宮が行われた。

青木賢清は正殿を造営し、遷宮が行われた後1656年に75才で没した。

・その後

イ．くんち

長崎市では、前述の諏訪神社の祭礼『長崎くんち』がつとに有名な祭りとなった。

毎年10月7日から9日までの3日間開催され、中でも「じゃ踊り」が有名で国の重要無形民俗文化財・長崎くんちの奉納踊りとなっている。

『くんち』の名称は、お祭りが旧暦の重陽の節句（菊の節句）に

当たる9月9日に行われていたためであるが、『くんち』は九州弁で9日のことである。

博多くんち、唐津くんち等、この頃に各地で行われるくんち祭りは神社の縁起がもとでおこなわれているが、『長崎くんち』はキリスト教徒に対峙するために諏訪神社初代宮司・青木賢清と長崎奉行が行った『公のイベント』を起源とするものなのである。

因みに『長崎くんち』は「龍踊（じゃおどり）」「鯨の潮吹き」「太鼓山（こっこでやま）」「阿蘭陀（おらんだ）万才」「御朱印船（ごしゅいんせん）」など、ポルトガルやオランダ・中国・ヴェトナムなど南蛮紅毛文化の風合い色濃く残した独特でダイナミックな演物（奉納踊り）を特色としており、笠鉾、曳物（山車・だんじり）、太鼓山などは京都や堺の影響が窺える。

ロ、島原・天草の乱

島原ではキリシタン大名有馬の時代にキリスト教信仰が盛んであったが、1614年、転封によって松倉に代わってから年貢の取りたてが厳しくなるとともに、キリシタン弾圧が始まった。

天草も元はキリシタン大名小西行長の領地であったが、関ケ原の戦い以降寺沢が入部、島原同様の圧政とキリシタン弾圧を行った。

このような状況下で1637年に、島原・天草の乱がおこったのであるが、これは最大規模のいわば一揆であり、これを最後に大きな内戦がなくなりいわゆる鎖国が始まるのである。

この事件は、従来「キリシタンの宗教戦争と殉教物語」という描かれ方が多かったが、これは圧政を行った島原藩主松倉がキリシタンの暴動を主張し、幕府もこれをキリシタン弾圧の口実に利用したというのが真相のようである。

島原の乱については数多くの作品・資料が出回っているのでここでの詳述は省略する。

完